# 漢詩を味わう

第62回

# 江村　杜甫

清江一曲抱村流
長夏江村事事幽
自去自来梁上燕
相親相近水中鷗
老妻画紙為棊局
稚子敲針作釣鉤
多病所須唯薬物
微軀此外更何求

清江　一曲　村を抱いて流る
長夏　江村　事事幽なり
自ら去り　自ら来る　梁上の燕
相親しみ　相近づく　水中の鷗
老妻は紙に画いて棊局を為り
稚子は針を敲いて釣鉤を作る
多病　須つ所は唯だ薬物
微軀　此の外　更に何をか求めん

清らかな川の流れは、一曲がりして村を抱きかかえるように流れている。
日ながの夏、この川ぞいの村では何事も静かで落ち着いている。
家の梁の上に巣を作った燕は勝手気ままに往ったり来たりしているし、
水の中に遊ぶ鷗たちも、私に馴れ親しみ近寄ってくる。
家では老妻が紙に線を描いて碁盤をこしらえ、
幼い子供は縫い針を叩き曲げて釣り針を作っている。
今のこの病気がちな私に必要なものといえば、それは薬だけである。
こんな取るに足りない私ごときに、その他なにがいるものか。

《清　江》清らかな浣花渓の流れ。
《長　夏》日の長い夏の意。
《幽》静かに落ち着いていること。
《自去自来》自然に自由に行動すること。
《梁上燕》家の梁の上に巣を作っている燕。
《相親相近》相は互いにの意味ではなく、自分に対して一方的な意味をしめす。
《須所》必要とするところ。
《微軀》取るに足りない身。自分を謙遜して言う。

杜甫は安禄山の乱に際して、粛宗の行在所に馳せ参じ、その功をかわれて漸く仕官の望みを叶え、左拾遺という高い官職に就きました。しかし程なく出した上奏文が粛宗の怒りに触れて、華州（陝西省華県）の地方官に左遷されてしまいます。それから一年ほどして大飢饉にあい、自ら官を辞し無官の身になって、家族とともに戦乱と食糧難を避けて秦州（甘粛省天水県）へ旅立ちました。しかし、気候風土もよくないうえに、夷荻が西から攻めて来て治安も悪く、今度は南の同谷に移り住みますが、ますます困窮し、山でドングリを拾い、山芋を掘って一か月ほど生活します。やがて有名な蜀の桟道を通り、成都へやってきます。杜甫四十八歳の時でした。

成都の町は、物資が豊富で、また親類や知人の援助があり、成都に来た翌年春に、杜甫は浣花渓のほとりに草堂を建てて、五十一歳の夏ころまでの約三年間を暮らします。この地での生活は珍しく平和で杜甫にとって最も幸福な時期でした。

詩の始まりは先ず、夏の川辺の村が静かで穏やかなことを述べています。次に燕や鷗ののどかに自由な姿を描いて、その平和な様子を如実に描いています。鷗については、こちらに害意がなければ近づいてくる、害意がはたらくと決して近づかないという「列氏」に見える故事を踏まえています。そしてその穏やかな自然に包まれた妻や子供など家族の生活は、具体的な一例を挙げて描き、平和な暮らしぶりが目に浮かんでくるようです。

詩の最後は自分自身のことです。ただ欲しいものは、病気がちな自分の体を慰めてくれる薬だけで、その他は何も不満がないと結んで、満ち足りた気分をうたっています。

この浣花草堂で暮らしていたこの時期の詩は、それまでの長い漂泊の旅のなかにあって、自己の憂鬱をうたうことに懸命だったのに比べて、自然の善意にめざめ、人間もまた善意に満ちた自然のなかの一つであることを自覚し、新境地を開いたと言われます。

参考文献：中國詩人選集9杜甫上（岩波書店）・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・杜甫 宇野直人著（平凡社）

薫風何處よりか来り　我が庭前の樹を吹く　啼鳥繁陰を愛し　飛び来たりて飛び去らず。

《大意》かんばしい夏の風がどこからかきて、我が家の庭先の樹を吹きぬける。鳴き声をたてる鳥は茂った木陰が好きなようで、飛んできたまま飛び去ろうとしない。（于謙詩・偶題）

竹影階を掃って塵動ぜず

《大意》竹が風に吹かれているのか、その影が動いて階段の上を掃うが、影だから塵も動かない。（白隠・槐安国語）

佐藤象雲書

**読み**　碁局長夏（ききょくちょうか）を消す（囲碁をして暑い日長の夏を忘れて送る。「蘇東坡」）

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草　書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

情を千里の光に寄す

## ペン字部課題　（７月31日〆切）

## 細字部課題　（７月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

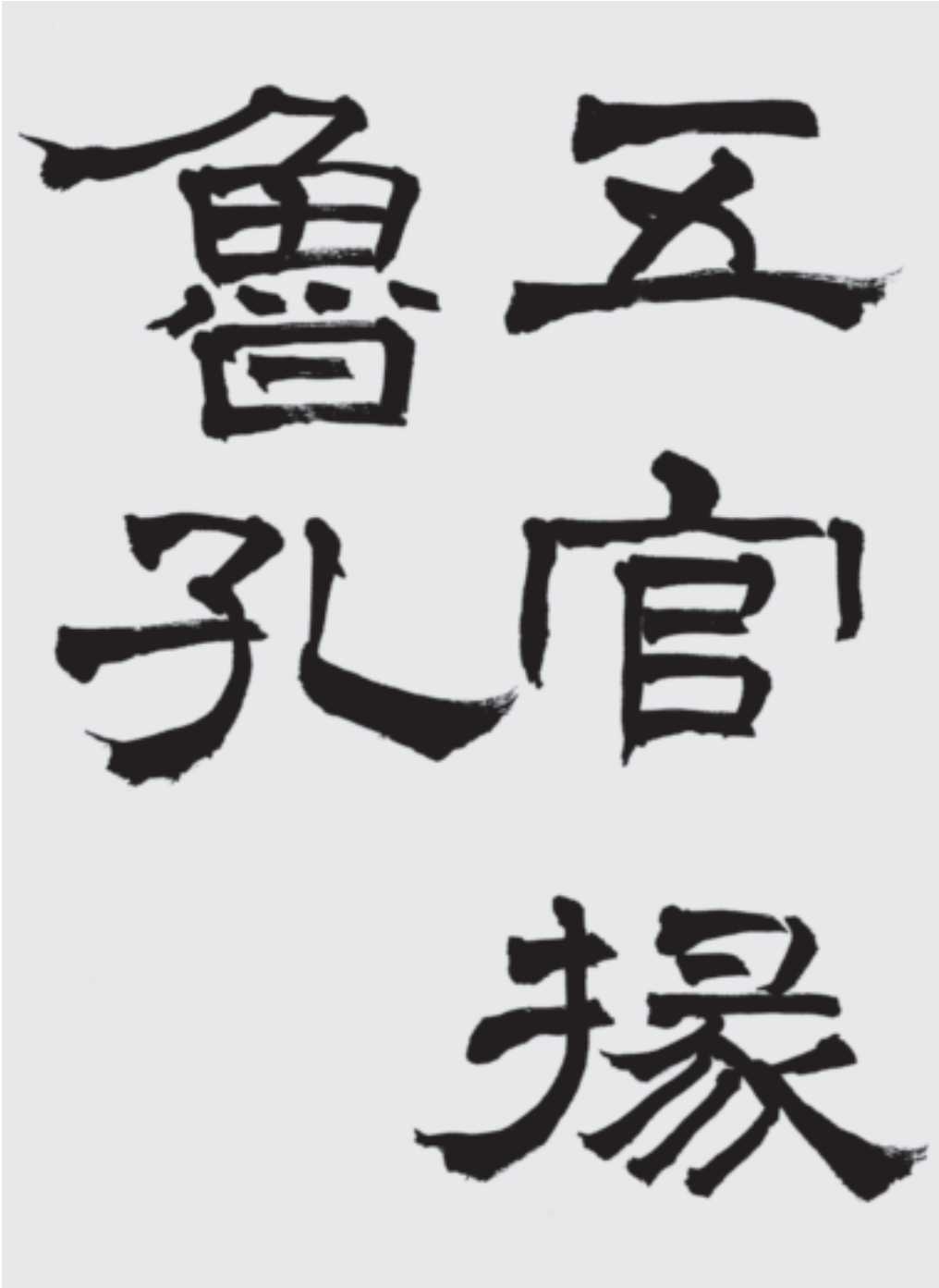
音　テンチゲンコウ　ウチュウコウコウ

略解　天はくらく、地は黄色である。宇宙は大きく広い。

和泉溪石先生書

五官掾（ごかんえん）たる魯（ろ）の孔（こう）（暢（ちょう））

## ■史晨後碑（ししんこうひ）（後漢・西暦一六九年）の臨書（6）




象雲臨

『五官掾魯孔』

秦時代は曲線を駆使した縦長の美しい姿態を特徴とする小篆が公式書体な書体でしたが、当時、一般にはもっと簡略化の進んだ文字が実用体として書かれていたことが知られています。これは「秦簡」といわれるもので、篆書の筆意を残しながら、直線を主体とした隷意が認められるもので、隷書の萌芽期の書体といって良いと思います。そして、この史晨碑のような漢隷の完成までは、約三百年の準備期間を要することになります。この史晨碑が書かれた前後約二十年の間に百花繚乱のごとく漢隷の花が咲き、曹操が禁碑令を発布する後漢の二〇五年まで、数多くの石碑が登場しました。代表的な漢隷（八分隷）の書かれた年代は次のとおりです。

後漢一五三年　乙瑛碑
後漢一五六年　禮器碑
後漢一六四年　孔宙碑
後漢一六五年　西嶽華山廟碑
後漢一六九年　史晨碑
後漢一七一年　西狭碑
後漢一八五年　曹全碑
後漢一八六年　張遷碑

左右に暎帶す

象雲臨

## ■王羲之・蘭亭序（東晋・西暦三五三年）の臨書（8）

『暎帶左右』

多くの初学者は、書聖王羲之の書が素晴らしいと教えられ、まず習わねばならない古典として考えています。しかし、これが非常に難しく、技法も多様で、何を主眼にして学ぶのかというのが分からなくなる場合が多いと思います。この蘭亭序もいわゆるきれいに整った字ではなく、傾いていたり、歪んだりしていて、王羲之の書という実態がつかめないまま、臨書を終える人がほとんどではないでしょうか。前回、郭沫若の蘭亭偽書説について触れましたが、蘭亭序が偽物かもしれないなどと言われれば、なおのこと迷いが生じます。

しかし、古典の学習や臨書は分からなくても先ずそれで良いのだと思います。誰でもが簡単に理解できるものほど古典としての価値は低いと言えます。習う人のその時々の心鏡の違いや、また経験理解度の違いによって古典の印象も様々に変化していきます。古典は時を変えて、何度も習うことが大切なようです。